作文

群馬県コンクール 金賞

幸せの味

沼田市立薄根中学校　3年　早　川　　心　優

私はお米が大好きです。だから毎日のようにお米を食べています。今回、この作文を書くにあたって普段何気なく食べているお米について、改めて考えてみることにしました。

私の祖父はかつておいしいお米をつくる農家でした。祖父の家に遊びに行くと、祖父のつくったお米と祖母がつくった唐揚げを食べるのが定番で、私も姉もそれを楽しみにしていました。そのときだけは普段しっかり者の父や母も、子どものように目を輝かせて口いっぱいに頬張っていたのを今でもよく覚えています。私の両親は毎日のように忙しく働いています。そのため、家族全員そろって食事をすることは滅多になく、私はいつも姉と二人だけでごはんを食べています。だから余計に家族そろって食事ができる祖父の家が小さいころからの楽しみでした。そして、家族みんなで食べる祖父のお米はどこか特別で、私たち家族にとって幸せの味でした。

私がこんなにもお米を好きになったのには理由があります。小学生のとき、友達関係がうまくいっておらず、誰かとけんかをする日々が続いていました。そのことを祖父に相談すると、炊き立ての温かいごはんを出してくれました。

「どんなに辛いときでも、ごはんを食べれば元気になる。また明日、元気で学校行って来い。」

そうやって泣いている私を励ましてくれました。そのときの味が今でも忘れられません。祖父のつくるおいしいお米には人を元気にする、そんなすごい力があるのだと実感しました。傷ついた私の心を癒してくれたあの味に今でも感謝しています。

そして、ある日突然、私に不幸が訪れました。今から三年前、私の祖父は亡くなりました。それからは祖父の優しさにふれることも、祖父のつくるおいしいお米を食べることもできなくなりました。祖父の死を乗りこえるにはとても長い時間がかかりました。亡くなってから初めて、祖父という存在が私にとってどれだけ大きな存在であったのか実感しました。

今の私には祖父のようにおいしいお米をつくることはできません。でも、祖父のお米に対する思いを受け継ぐことならできます。毎日何気なく食べているお米でも、誰かが精いっぱい、汗水たらしてつくったお米であること、おいしいお米を食べられるということに感謝をすること。そのことを忘れないようにしたいと思います。

「お米一粒に七人の神様」誰もが一度は聞いたことのある言葉ではないでしょうか。私はよく、小さいころから祖父に言われてきました。そのときはまだ、小さかったので祖父の言おうとしていることがわかりませんでしたが、今なら少しわかる気がします。祖父はお米をつくる大変さを知っていたからこそ食に関しては特に厳しい人でした。お米をつくる祖父の姿はとてもかっこよく見えて、いつしか私の憧れの存在になっていました。

祖父に教えてもらったことを深く深く胸に刻んで、これからもおいしいお米を食べられる幸せに感謝していきたいと思います。

「おじいちゃん、私に幸せの味を教えてくれてありがとう。おいしいお米をありがとう。」